

Title	千葉商科大学『会計リテラシー』
Sub Title	Chiba University of Commerce, Accounting literacy
Author	友岡, 賛(Tomooka, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2026
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.68, No.6 (2026. 2) ,p.95- 99
JaLC DOI	10.14991/007.20260200-0095
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20260200-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

千葉商科大学『会計リテラシー』

友 岡 賛[†]

本書を取り上げる事説

のっけからほかの人の評を用いるのはみっともないかもしれないが、或る書評によれば、本書は会計をもって「人々にとって必須の基礎教養」（柳瀬 [2025] 92頁）とする立場をもってまとめられており、「本書の最大の意義は、会計を「専門知識」ではなく「教養」として位置づけ直す点にある」（同上、93頁）とされる。

評者が目を留めたのは「教養」である。¹⁾

長く大学にあって会計学を講じ、ただしまだ、大学教育の意義は教養教育にこそあり、とする立

場を標榜する評者である。会計をもって「「教養」として位置づけ直す」とはどういうことか。

ここにいう「教養」とは何か。

慶應義塾を退職後、一応は会計学の教員として某商科大学に再就職したはずの評者ながら、所属は（ほかの会計学の教員のように）商学科ではなく、総合教養センター（Global Center for the Liberal Arts）とされ、しかも、そのセンター長を務めるに至ったが、この商科大学は教養教育の重要性をもって唱え、「自ら考え、行動する力……問題解決のために考え、積極的に行動するための力……これを「教養」と捉え²⁾」ているという。

ここにいう「教養」とは何か。

[†] 友岡賛：慶應義塾大学名誉教授／横浜商科大学商学部教授。tomo@fbc.keio.ac.jp

<引用について>

原文における（ ）書きや太文字表記や圈点やルビの類いは、原則として、これを省略した。したがって、引用文におけるこの類いのものは、特に断りがない限り、筆者（友岡）による。

また、引用に際して、旧字体は、原則として、これを新字体に改め、促音や拗音の類いが小文字表記されていない場合は小文字表記に改め、漢数字は多くの場合、算用数字に改めるなどの加筆を施している。

1) 書評とはいいいながらも、本書の趣意はおよそさで措いたまま、ただし、本書を切っ掛けとして、本書に託けて「教養」についてとつおいつする。

教養とは何か

とはいえ、本稿は、教養とは何か、リテラシーとは何か、といったことを云々する場ではない。⁴⁾

とはいえ、教養（culture）とは何か、liberal arts（教養教育）とは何か、literacyとは何か。

むしろ、「教養」の英訳が「culture」であったとしても、「「教養」＝「culture」】というわけでは

2) 千葉商科大学に非ず。

3) <https://www.shodai.ac.jp/education/department/curriculum/>

4) しかし、注記1)をみよ

は決してなく、もとより「culture」の和訳は必ずしも「教養」ではなく、また、日本語の「教養」についてはまずは「学問によって養われる心の豊かさ」といった意味が妥当しようが、他方、「literacy」には「読み書きの能力」、「教養」、「教養があること」、「教育を受けていること」、「(或る特定の分野における)知識」、「(或る特定の分野における)能力」などといった種々の意味があり、とりわけ「教養」という意味については「教養(culture)」と「教養(literacy)」の異ならない関係が難しい。

なお、本書自体は「リテラシー」について「『会計』は現代社会を生き抜いていく上での重要な基礎的素養、リテラシー云々」(2～3頁)とといった言い様をしている。

あらまし

閑話休題。本書の構成は下記のとおりである。

- 第1章 会計リテラシー
- 第2章 さまざまな分野で求められる会計知識
- 第3章 コーポレートガバナンスと会計
- 第4章 公会計——どこにでも必要な「会計」の視点
- 第5章 制度を支える会計専門職
- 第6章 決算書で「実態」が分かる
- 第7章 「減価償却」という考え方
- 第8章 財務三表とその他の決算書
- 第9章 企業の決算書を手に入れる
- 第10章 有価証券報告書は宝の山
- 第11章 会計基準はどう作られる
- 第12章 「時価会計」など会計の新しい流れ

「会計リテラシー」と題する第1章においては会計リテラシーの重要性が述べられる。会計不正事件の頻発が指摘され、そうした事件に際して強く用いられる「説明責任」という語について、

「説明責任」は「アカウンタビリティ」の訳ながら、アカウンタビリティは単に説明する責任ではないことが指摘され、「数字できちんと辻褄が合うように説明できる責任」(5頁)を意味するとされる。

第1章の後半にあっては企業における会計不正の具体的事例が紹介され、次いで「さまざまな分野で求められる会計知識」と題する第2章においては「お金にまつわる不正は企業だけではない」(24頁)とされ、さらに種々の事例が紹介され、いずれにおいても、対応には「『会計知識』が必要不可欠」(26頁)とされる。

「コーポレートガバナンスと会計」と題する第3章にあっては近時におけるコーポレートガバナンス強化の動向が説かれたのち、しかしながら、「ガバナンス改革を実行しても、経営実態をつかめなければ、監督することはできない。経営実態をつかむには、会計がきちんと行われている必要がある。つまり、ガバナンスと会計は表裏の関係にある」(48頁)と結ばれる。

「公会計——どこにでも必要な「会計」の視点」と題する第4章においては「国や地方自治体を使う「単式簿記」をベースにした会計ルールを「公会計」と呼ぶが、「企業会計」で発展した「複式簿記」とは決定的な違いがある」(63頁)ことが述べられ、「単式簿記の場合、お金の出入りに着目するので、借金をしてもそれは収入になる」(51頁)点が問題とされ、そうした「『単式簿記』の考え方は、時として、無節操な借金で資金を賄うことになり、借金に依存していく落とし穴がある」(63～64頁)とされ、これとの対比において複式簿記の長所が説かれる。

「制度を支える会計専門職」と題する第5章においては公認会計士業界の動向が概説され、公認会計士によって担われる会計監査の意義が説かれ、また、「知識より大事な会計倫理」(75頁)という問題が取り上げられ、「独立した立場から投資家を守るための倫理観、正義感の滋養が不可欠」(78頁)と結論される。

「決算書で「実態」が分かる」と題する第6章にあっては損益計算書および貸借対照表について概説され、さらには第4章に扱われた企業会計と公会計の異同にも言及され、公会計の場合は「支

5) 恐らく「『教養』⊂「culture」」でもなければ「『教養』⊃「culture」」でもないだろう。

出＝費用] ながら、企業会計にあっては必ずしもそうではないということが述べられ、その典型例が減価償却費にみられるとされる。

「[減価償却]という考え方」と題する第7章にあっては前の第6章を承けて公会計との対比において減価償却の意義が説かれる。「老朽インフラ問題」(104頁)とかかわらしめて減価償却の意義が説かれる。公会計との対比において企業会計(複式簿記、発生主義、費用収益の対応等)の意義が説かれている点が本書の特徴ともいえようか。

「財務三表とその他の決算書」と題する第8章においては第6章に続いて損益計算書および貸借対照表について概説され、損益分岐点、あるいは自己資本比率等の意義が説かれ、また、キャッシュ・フロー計算書について概説される。

「企業の決算書を手に入れる」と題する第9章においては企業の決算発表について概説され、そこにおける種々の情報の意義が説かれ、さらに株主総会を受けて有価証券報告書が作成されることに言及され、これを受けて「有価証券報告書は宝の山」と題する第10章において有価証券報告書が詳説される。

「会計基準はどう作られる」と題する第11章にあっては会計基準の国際化、グローバル化の進行について概説され、そうした文脈における日本の会計基準の問題点が組上に載せられる。

「[時価会計]など会計の新しい流れ」と題する第12章においては国際財務報告基準と日本の会計基準の異同が概して日本の基準の遅れの指摘といった趣意をもって概説され、さらには重要性を増しつつある開示項目として非財務情報、とりわけ気候変動および人的資本にかんする情報開示の意義に言及される。

教養としての会計

本書は千葉商科大学編とされているが、そうした本書刊行の事訳については「千葉商科大学では2025年度から、すべての学部の新入生……に「会計リテラシー」という講義を必修で履修してもらうことに決めた」(194頁)とされ、「おそらく「会計リテラシー」という科目を設置するのは千葉商科大学が初めてではないか」(194頁)とされており、さらに「会計リテラシー」設置の事訳に

ついてはかつて同大学の学長加藤寛が「大学教育の基礎として「3言語」……「自然言語(英語)」「情報言語(コンピューター)」「会計言語(簿記)」の3つ」(194頁(()書きは原文))を掲げていたとされる。

「学生が徹底的に学ぶべきものとして、「コンピューター」と「英語」と並び、「簿記」を掲げ、加藤はそれを「3言語」と呼んだ」(iii頁)。

「大学教育の基礎」はこれを別言すれば、「教養教育(liberal arts)」か。いや、如上の「3言語」は「読み書きの能力(literacy)」か。ここにいう「大学教育の基礎」は「教養(culture)」というよりも「教養(literacy)」だろうか。

冒頭に引いた書評によれば、「本書の最大の意義は、会計を「専門知識」ではなく「教養」として位置づけ直す点にある」とされる本書である。教養としての会計とは何か。

ずばり『教養としての「会計」云々』と題する書によれば、「教養としての会計とは……会計というものを大局的に理解し、基本的な概念と考え方を学ぶこと」(金子[2023] 4頁)とされ、「すべてのビジネスパーソンは、会計を教養として知っておく必要がある」(同上、2頁)とされる。

評者とすれば、教養のごときは「知っておく必要がある」といった類いのものでは決してないといえ、その点については同意しえないが、ただし、「大局的」ないし「基本的」については、細かい知識に非ず、という意味であればまずは首肯する。

しかしながら、やはり「必要云々」には首肯しえない。「役に立たないことを学び、知ることを楽しんで欲しい⁶⁾」と学生諸君に望み、役に立たないことを学ぶ場こそが大学と唱え、役に立たない会計学をもって標榜する評者とすれば、「必要」がないことこそを学んで欲しい。

役に立たないことを学ぶ。役に立たせることを意図せずに学ぶ、とも換言しえようか。学ぶだけでは駄目なのか。

6) <https://www.shodai.ac.jp/teacher/detail/137>

或る小説に「読むだけじゃ駄目なのか」(野崎 [2024] 192頁⁷⁾)という問い掛けを見付け、思わず傍線を引いた。

学ぶだけでは駄目なのか。学ぶために学ぶ、学ぶためにのみ学ぶ、とも換言しえようか。

本書によれば、「日本社会では「会計」を学ぶチャンスはあまりない。大学でも「会计学」が必修科目になっているのは商学部など社会科学系の一部の学部だけで、一般教養としても「会计学」を選択する学生は多くない。経済学を学んだ学生でも会計学は取らなかった、という人もいるだろう⁸⁾。欧米の大学では基礎教育の一環として Accounting を必修科目にしているところが少なくないのとは対照的」(3頁)とされているが、しからば、例えば文学部、あるいは工学部の学生が学べば、教養としての会計ということか。

もっとも「企業経営だけでなく、どんな社会で活動するにも「会計リテラシー」が不可欠」(iii頁)とし、「どの分野のどの職種についても、会計知識が不可欠」(4頁)と唱える本書は、したがって、会計の必要性をもって唱えており、如上の評者の立場はこれと真逆というよりほかない。筆者とすれば、例えば文学部に学んで文学者の道を志す者がその道には要らない会計を学べば、それは教養としての会計ともいえようが、他方、本書とすれば、「どの分野のどの職種についても」、すなわち文学者にとっても会計の知識は必要ということだろう。

教養教育とエレガンス

エレガントな若者を育てたい。

評者が大学教師として目指してきたことはエレガントな若者を育てることである。

「エレガント」、あるいは「エレガンス」は抽象

的に過ぎようが、具体的には、夏目漱石描くところの高等遊民、これが評者の理想である。

むろん、エレガンスのごときは出自、育ちに負うところが少なくなく、大学教育のなしうことはたかが知れているが、しかし、そうした大学教育においてなしうことは教養教育 (liberal arts) を措いてほかにないと考える。

とりわけ商学系の学部において扱われる経営学、商業学、会计学等は概して頗る実践的な学問と看做されているが、そうした学部においてこそ、教養教育に意義を認めたい。

概して頗る実践的な学問と看做されている会计学を手掛ける評者は如上のことをまずは歴史、すなわち会計史を教授することをもって行ってきた。

例えば「史料の存在としては、1211年、フィレンツェの両替商の帳簿に複式簿記がある、といわれる」(友岡 [1996] 70頁)などといったことをただ知って欲しい。複式簿記におよそ800年の歴史がある(かもしれない)ことをただただ知って欲しい。「歴史を学ぶことの意義」(友岡 [2024] 7頁⁹⁾)などといったことは、むろん、決して述べない。

文 献

金子 [2023]: 金子智朗『教養としての「会計」入門』日本実業出版社。

友岡 [1996]: 友岡賛『歴史にふれる会计学』有斐閣。
友岡 [2024]: 友岡賛「福澤諭吉と複式簿記の伝播」『三田商学研究』第67巻第5号。

野崎 [2024]: 野崎まど『小説』講談社。

柳瀬 [2025]: 柳瀬博一「千葉商科大学編『会計リテ

7) 「読む意味。けど意味とか言い出すと結局読むだけじゃ駄目みたいな話になりそうだし、意味求めて読むものじゃない気もしたし……意味ってのもよくわかってなくて」(野崎 [2024] 192頁)と続く。

8) 「ビジネススクールでは(でも?) 会計科目は敬遠されがち」(金子 [2023] 1頁)ともされる。

9) 会計史の書に限ることなく、概して歴史書の類いには「歴史を学ぶことの意義」についての記述が付きものながら、評者とすれば、歴史を教授する際にそうした意義などといったことは決して述べない。意義はこれすなわち役立ちであって、そうしたことは決して求めない。「へえ、そんなことがあったんだ」といった、知ることの喜び、のききもたらしたい。「のみ」でよい、ということではなく、「のみ」こそをもたらしたい(友岡 [2024] 6～7頁)。

ラシー——あらゆる世界に必要な“会計の視点”を
学ぶ』（書評）『会計・監査ジャーナル』第37巻第
10号。

同文館出版，2025年4月
A5 変形判208頁，1,980円

2025年10月27日成稿